

私たちとミツマタ

春になると、新宮町のミツマタ畑や翠波高原の「みつまたの里」に黄色い花が広がり、夏には「こうぞみつまた花が咲く」と、紙おどりの唄が聞こえてきます。

今回の特集では、^{こうぞ}楮や^{がんぴ}雁皮と並ぶ和紙の原料であり、日本一の紙のまち四国中央市の礎を築いたミツマタの魅力をお伝えします。

紙ならなんでもそうう
日本一の紙のまちは
お札の原料もそうう！



写真 翠波高原「みつまたの里」

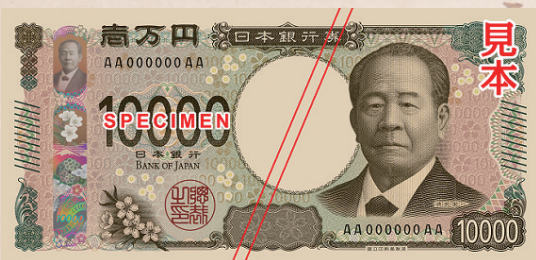
1 春を告げる

ミツマタは、ジンチョウゲ科に属する中国やヒマラヤ地方原産の落葉低木です。

そのため、ミツマタは「春を告げる花」とも言われています。一つの時代にどこから日本に入ってきたのかは定かではありませんが、近年の研究では、奈良時代から三桎紙（ミツマタで漉いた和紙）が作られていたとされています。

2 紙幣に採用

同じく和紙の原料である楮や雁皮と同じ方法で処理をすると、赤みがかかることが難点だった三桎紙は、江戸時代までは雑用紙として使われていました。ミツマタが和紙の原料として注目されるようになったのは、明治に入ってからです。大蔵省印刷局（現・国立印刷局）が、ミツマタを使って紙幣に適した紙を漉くことに成功し、原料を確保するためにミツマタの栽培を推奨しました。以来ミツマタは、今日まで紙幣の主原料として使用されています。



今月改刷される1万円札にもミツマタが使われている。
出典：国立印刷局ホームページ（https://www.npb.go.jp/ja/n_banknote/index.html）

教えて！ミツマタのこと

愛媛大学
紙産業イノベーションセンター
(妻鳥町)

内村 浩美
ひろみ
センター長



愛媛大学特別栄誉教授。昭和58年大蔵省印刷局に入局。紙の研究や偽造防止技術の開発に携わった経験を活かし、平成22年から愛媛大学の教壇に立つ。

ミツマタが紙幣の原料に選ばれた主な理由として、人工栽培が可能であること、そして紙の丈夫さに加えて、印刷局が独自に開発していた「透かし」の再現性に優れていたことが挙げられます。

紙の強度（丈夫さ）は、繊維1本当たりの強さや繊維の長さ、繊維同士の結合力などによって決まるのですが、ミツマタは繊維1本当たりの強さと繊維の長さが他の原料よりも優れています。丈夫であることから、長い期間折り曲げられながら使われる、紙幣のような用途に適しているのです。

日本の紙幣は世界で最も優れていると言われていますが、その要因の一つは、原料のミツマタにあるのかもしれない。

教えて！ミツマタのこと

平成22年に愛媛・徳島・高知の調達所を集約してできたのが「四国みつまた調達所」です。



昭和63年入局。小田原工場製紙部で長年紙幣の製造に従事。令和5年から現職。出身は神奈川県。

独立行政法人国立印刷局
四国みつまた調達所（三好市池田町）
清水康幸 所長



写真上 調達所の倉庫に保管されているミツマタ。毎年1～5トンが納入される 写真右 四国みつまた調達所（徳島県三好市池田町）。敷地内にもミツマタが植樹されている



3 四国は紙幣國

紙幣に使われるミツマタは、印刷局に納められることから「局納みつまた」と呼ばれます。ミツマタの栽培が盛んだった島根、岡山、山口、高知、徳島、愛媛の6県は、印刷局と契約し、局納みつまたを生産していました。また、山口を除く5県には、印刷局の「みつまた調達所」が設置されていました。

愛媛県のミツマタ生産量は、昭和40年時点で高知県に次いで全国2位でした。日当たりの良い所を好まないミツマタは、山の北側斜面や林の中など、主に山間部に群生し、宇摩地方でも新宮地域や嶺南地域で、質の良いミツマタが多く栽培されていました。

局納みつまたの生産登録をしている農家さんから納められたミツマタは、調達所の倉庫で保管された後、印刷局の工場に送られます。ミツマタであれば何でも良いというわけではなく、成分分析を行い基準をクリアしたもののだけを購入することで、紙幣の品質を保つようになっています。

また調達所では、ミツマタの調達以外にも、生産農家さんに技術指導したり、優れた生産農家さんを表彰したりして、局納みつまたの品質の維持と継続に努めています。

教えて！ミツマタのこと

生産農家（新宮町新瀬川）
石川幸子さん



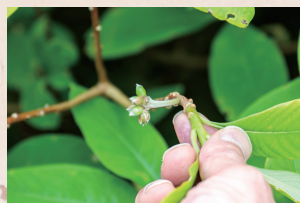
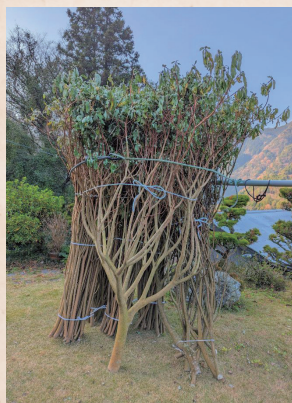
息子さん夫婦と自宅前の畑でミツマタを栽培。若き手渡き和紙職人を応援したいと、ミツマタを提供している。

ミツマタを局納していた当時は、毎年のように表彰していただきました。お札にするミツマタは株から枝までの長さが長いほど良いそうので、技術指導に来ていた印刷局の職員さんから「密植すると背が高くなる」と教えていただきました。

ミツマタの収穫は花が咲く前の1月に行います。株から伸びた幹のうち、ある程度の太さになったものだけを切り取ります。翌年には切ったところから幹が伸び、2年で出荷できる太さになります。一つの株からずっと収穫ができた方が良いのですが、実際は枯れることもあるので、種から育てた苗で補植しています。

ミツマタの育て方

- ①花が散った5月頃に実を収穫し、中に入っている種を取り出す。
- ②日の当たらない所で乾かないように保管し、翌年の4月に肥料と一緒にまく。
- ③1年後、60cm程に成長した苗をミツマタ畑に植替える。



写真右 種から育てて2年目のミツマタ。奥に見えるのは3年目 写真中 ミツマタの実 写真左 収穫されたミツマタ





4 かいりょう 改良紙のまち

大蔵省印刷局が開発したミツマタの処理方法は和紙業界に広がり、宇摩地方をはじめとする紙の産地では、白い三極紙である「改良紙」が作られるようになりました。特に宇摩地方では、原料や処理方法の研究開発、道具の改良・開発のほか、不足する原料の移入と製品の販売ルートを開拓するなど、先進的な取り組みを行った結果、改良紙の一大生産地になりました。

教えて！ミツマタのこと

手漉き和紙職人（具定町）
大西満王さん



大学在学中に修行し卒業と同時に新宮町で「多羅富來和紙」を創業。手漉き和紙を本市の産業として続けるべく活動中。

当工房では、新宮産のミツマタを中心に、楮や木材パルプなどを使って和紙を漉いています。きめが細かく印刷適性に優れるミツマタですが、そのきめ細かさ故に、漉くときに水が抜けにくかったり、漉いた紙同士がくっつきやすかったりという難しさもあります。でも、地元産のミツマタを使った和紙の品質は格別です。

僕が和紙を漉けるのも、原料であるミツマタを農家さんが栽培してくれているからです。生産農家さんも手漉き和紙職人もわずかになりませんが、僕がミツマタを使って和紙を漉くことで、盛り上げていきたいです。



写真上 新宮町にある工房で和紙を漉く大西さん 写真中 工房の軒先で乾燥中のミツマタ 写真下 ミツマタ 100%の紙料

5 紙産業の礎を築く

生産地の過疎化、生産者の高齢化と後継者不足、和紙需要の減少などにより、ミツマタの生産量は減少しました。昭和40年に全国で5450ヘクタールあった栽培面積は、令和2年には41ヘクタールにまで減っています。本市においても現在では、新宮地域と嶺南地域の一部でしか見ることはできません。

通常、原料の産地が生産地となることが多い中、宇摩地方では、改良紙の製造

において、技術革新や船舶を使った大量の原料移入・輸入と各消費地への移出・輸出という、現在の製紙産業のモデルを作り上げたことが今日の発展につながったのです。

豊かな水資源や世界につながる港とともに、本市の紙産業の礎を築いたミツマタに今一度注目し、「お札（原料）もそろつ」、「日本一の紙のまち四国中央市」をもっと盛り上げていきましょう。

この夏は
ミツマタで
決まり！

第1弾

手漉き和紙職人と
ミツマタを彩る

¥0
FREE

七夕ワークショップ

7.7 [SUN] 10:00-15:00

霧の森 イベント広場

手漉き和紙体験&
七夕飾り作り

ぜひ、遊びに来てください



問 地域おこし協力隊 大廣隊員

☎ 28-6410

詳細はこちら▶



第2弾

写真展示

ミツマタと新宮

¥0
FREE

7.8 [MON] - 7.31 [WED]

霧の森 ふれあい館ギャラリー

ミツマタの七夕飾りや
お札に関する資料も展示

第3弾

紙アクセサリー作家が教える

ミツマタワークショップ

8.10 [SAT]・8.11 [SUN]

10:00-15:00

霧の森 ふれあい館ギャラリー

講師 松本莉央さん

（現代美術家/紙アクセサリー作家）

パネル展「市の花 ミツマタ」も 8/31 まで開催中！



多羅富來和紙謹製

ミツマタ紙



本特集ページの背景は、多羅富來和紙で漉かれた新宮産ミツマタ 100%の和紙を撮影した写真です